

# 通信教育部

# スクーリング レポート

全国で約7,300名が在籍する日本福祉大学通信教育部では、在宅学習だけでなく、北海道から沖縄まで全国各地で対面形式のスクーリング講義を開講しています。職業や年代の異なる学生同士が意見交換することで生まれる学びは、オンデマンド学習にはない魅力です。今回は、名古屋会場で開催されたスクーリングの様子を紹介します。



## 科目名 認知症ケアと多職種連携

2018年11月3日(土)・4日(日)  
愛知県名古屋市/明治安田生命名古屋ビル

**講師**



福祉経営学部(通信教育)  
**中島 民恵子** 准教授

**テーマ**

増え続ける多様な症状・特徴をもつ認知症の人。  
そして、より必要となる専門職の連携。「その人らしい暮らしを求めて」

2025年には約700万人、65歳以上の高齢者の5人に1人が認知症になると見込まれています。認知症ケアは個性が高く、支援の方法も多岐にわたります。今後さらに増え続けるであろう認知症の人の「その人らしい暮らしの継続」を支えるためには、専門職間における適切な連携が必要とされています。本講義では、本人がその症状によって失いがちなその人らしさ(個性・意思・尊厳)を保ち、本人が持つ力を発揮できることを支えるために、1) 認知症の人の症状や特徴などの基本的理解を深め、2) 認知症の人を取り巻く専門職の役割や多職種で連携し支援するあり方を学びます。

**時間割**

11/3(土)	
第1講	担当教員による講義「認知症の当事者の声から学ぶケアとは」
第2・3講	ゲスト講師によるリレー報告: 「私たちの実践と、関わる人たちに伝えたいこと」 講師:山田真由美(おれんじドアも〜やっこなごや代表)、 鬼頭史樹(名古屋市認知症相談支援センター)
第4講	担当教員による講義「多職種の役割と連携の意義」
第5・6・7講	担当教員によるグループワーク 「事例を通した多職種連携実践の検討①」
第8講	担当教員による講義「まとめ」

**担当教員による講義**

主な認知症としてアルツハイマー型認知症、血管性認知症、レビー小体型認知症、前頭側頭型認知症の症状と経過について詳しく紹介し、それぞれの支援のポイントを考察。また複数の専門職が認知症の人の初期支援を包括的、集中的に行う「初期集中支援チーム」の事例を挙げ、その効果などを紹介しながら、認知症の人の言動の意味や求めていることを理解し、本人の視点に立つことの大切さを説きました。



**Pick up!**

**11/4(日)**

第9講	担当教員による講義 「疾患別ステージ別の症状・特徴とチームでの支援」
第10・11講	ゲスト講師による講義 「多職種と地域との連携で進める認知症の人の意思決定支援とは」 講師:成本迅(京都府立医科大学大学院 医学研究科教授)
第12・13講	担当教員によるグループワーク 「事例を通した多職種連携実践の検討②」
第14講	担当教員による講義「まとめ」
第15講	科目修了試験

**ゲスト講師による講義**

京都府立医科大学大学院 医学研究科の成本迅教授は、自身が携わった認知症総合対策推進計画「京都市オレンジプラン」を紹介しながら、認知症の人の意思決定支援の重要性と難しさについて語りました。また認知症の人の財産管理能力、成年後見制度の利用状況などにも話を広げ、病院(医療)と地域が連携し合ってサポートの質をさらに高めていくために必要なことを学生と話し合いました。



**Pick up!**

# 国際交流

意欲ある学生をバックアップ

## 学生活動支援助成

### 海外研修体験記

研修期間	2018年7月20日～8月10日
研修先	アメリカ
研修テーマ	アメリカにおける医療・看護のあり方と国際保健について学び、さらなる知識の習得、視野の拡大を図る



わたなべ すずな  
**渡邊 鈴菜**さん  
看護学部 看護学科 4年  
愛知県/豊橋南高等学校出身



### 語学検定料補助

2008年度に語学検定料に対する補助金をスタートしてから、毎年TOEICや英検を中心に、より高いレベルの語学検定を目指す学生に対して、検定料を補助しています。継続的に英語学習に取り組むことで、着実な成果が出ていますので、後援会では引き続き学生の語学学習を支援していきます。

### 海外研修・調査奨励金制度

学生自らが企画した海外研修・卒論執筆に向けた調査を対象として、学生の海外における活動を経済面からバックアップしています。申請者には書類審査、面接等を実施し、採用が決定した学生には、必要となる渡航費用や授業料等を援助しています。

諸外国で活躍する「NP(ナース・プラクティショナー)」の現場を見てみたいと思い、参加しました。NPは、医師の指示を受けずに一定レベルの診断や治療などを行える資格で、日本には相当する資格がまだありません。研修は、NPが確立されているアメリカで実践しながら医療英語やメディカルプレゼンテーションを学んだり、医療現場の看護師に付かせてもらったり、地域で働くNPに話を聞いたりと実に濃厚な3週間でした。最も印象的だったのは、医療における日本とアメリカとの相違点・類似点です。例えば医療報告。アメリカの場合、良くないことも全て患者に伝えますが、日本では相手の気持ちを推しはかり、敢えて伝えない傾向があります。文化や感覚の違いによって異なるアプローチを間近にし、相手に寄り添う看護とは何かをより深く考えるきっかけになりました。また多種多様な人、考え方に接したことで、自分を見つめ直すことができ、将来像がクリアに。帰国後も勉強意欲は向上し続けています!

